

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 修辞学

小松原 哲太

◆修辞学(レトリック)は、言語学、文学、心理学、コミュニケーション学など、多くの分野にまたがる学際的研究領域である。ここでは理論言語学の視点から、2019年の研究動向を紹介したい。◆実証的研究を行うためには、信頼できるデータが必要である。Marianna Bolognesi et al. (eds) (2019) *Metaphor and Metonymy in the Digital Age: Theory and Methods for Building Repositories of Figurative Language* には、国外のレトリックのデータベース構築プロジェクトと、その理論的・実際の問題点について論じる9本の論文が収録されている。なかでも、Eve Sweetserらによる *MetaNet*、Antonio Barcelona による *Córdoba Metonymy Database* が注目される。また、日本語のデータベースとして、筆者らは2019年に『日本語レトリックコーパス』のベータ版をウェブ上で公開した。◆語用論の領域では、「うそ」や「だまし」といった不誠実な言葉のレトリックを分析する、山本英一(2019)『ウソと欺瞞のレトリック—ポスト・トゥルース時代の語用論—』が注目される。レトリックをあつかう語用論としてまず思い浮かぶ関連性理論では、誠実な話者が、最小の労力で最大の効果を得るように解釈すると考える。しかし、不誠実な発話では、話者はメッセージを伝えようとはしていないし、むしろ相手に(自分にとっては好都合な)混乱を引き起こすことを狙っている。不誠

実なレトリックの濫用は、コミュニケーション研究の未開拓領域であり、本書はその研究の糸口を与えている。◆文法論と修辞学の接点を探求する試みとして、伊土耕平(2019)「文法と修辞のあいだ」『岡山大学国語研究』33: 1-14 は興味深い。修辞技法を4つに分類し、(A) 文法とは関係しないもの、(B) 文法の前で作用するもの、(C) 文法と修辞のどちらとも言えるもの、(D) 文法の後で作用するものを区別している。この論文では、修辞は思考内容、意味構造、文法構造、表現形式の諸側面で作用し得ると想定されている。この「修辞」の作用とは何であり、どのような体系と構造をもつのかという問題は、議論すべき論点として残る。◆認知言語学の領域では、Lorena Pérez-Hernández “XL burgers, shiny pizzas, and ascending drinks: Primary metaphors and conceptual interaction in fast food printed advertising” *Cognitive Linguistics* 30(3): 531-570 が挙げられる。ファーストフードの広告の視覚的レトリックを定量的に分析し、「プライマリーメタファー」(Grady 1997)が、商品についての肯定的な評価や感情を引き出していることを論証している。IMPORTANT IS BIG, GOOD IS BRIGHTなどのプライマリーメタファーは身体経験に由来しているため、異なる文化的・社会的背景をもつ人々に共通の理解を与える手段になるという指摘は重要である。◆以上のように、修辞現象はきわめて多面的で、研究成果の発表媒体も分散している。これらを総合的に議論する研究の場が待たれる。

(神戸大学)